

閉店

2023. 10. 23

私が、今までに勤務した学校のうち2つの学校がなくなってしまった。閉校である。時代の流れとはいえ、さびしい気持ちになる。学校はなくなっても、お世話になったという感謝の念はずっともっていたい。

こここのところ、閉店という話題を耳にすることが多くなった。老舗百貨店、中核市にはあって当たり前の大型スーパー、何十年も続いた有名店などである。数年前に、福島市の北部エリアにあったラーメン店が閉店した。その店は、ご主人が一代で築いた店だった。張り紙には、「もう疲れました」とあった。閉店する直前に、3日連続で通った。注文するのは、いつも決まっていた。それを3日続けて食べさせてもらった。もう食べることができなくなると思ったのだろう。今でも、ふと懐かしく食べたくあるときがある。

福島市の老舗店も閉店した。すずらん通りにあったお店を移転させたものだった。すずらん通りと言っても、若い人はわからないだろう。現在のパセオ通りである。コロナ過も落ち着いて、これからというときにどうしたのだろうと思った。女性オーナーが高齢のためなのかと思っていた。だが、違っていた。閉店の理由は、人手不足だった。意外だった。たまたまだが、この店には、今年になって3回行ってた。3回目は、閉店直前だった。頼んだものが、なかなか出てこない。人手不足、なるほどである。

喜多方の有名店が、そのうちなくなってしまうことは、ラーメン博士のような方から聞いて知っていた。それが、9月でやめてしまうという。急だった。間に合わなかった。最後の一杯を味わうことができなかった。喜多方から、あのお店がなくなってしまう。さびしい限りである。もう何年前かは忘れてしまったが、初めてこの店に行き、喜多方ラーメンというものを知った気がする。チャーシューメンを注文した。おばあさんが運んできてくれた。どう見ても、チャーシューが少ない。忙しそうで、申し訳ないとは思ったが、一応言ってみた。すると、「今、なおしてきますから」なおす。どういうことだ。想像が膨らんだ。再び、おばあさんがやってきた。何のことはない。チャーシューが数枚増えただけだった。ラーメンを運んでくるあばあさんの右手の親指が、しっかりスープの中に沈んでいたのが懐かしい。

これからも、長い伝統をもった店が閉店に追い込まれていくのかもしれない。それぞれに事情がある。高齢化、後継者不在、人手不足などである。お店がなくなっても、地域に貢献したこと、お客さんに幸せな時間を提供したことは、いつまでも残る。何人の人たちが、その店を訪れるたびに満足し、笑顔でそのお店を後にしたのかわからない。私も、その一人である。

閉校や閉店には、マイナスなイメージがつきまとう。だが、その人の心の中にはずっと残る。そのことが大事である。